

[講演]

労働者協同組合への期待

堀内光子（ILO 駐日代表）



グローバル化と企業の社会的責任

菅野さん、木下さん、吉宮さんの話を聞きながら、実はグローバルの問題と地域の問題、そしてその間をつなぐ国の問題は近くなっていると実感した。90年代に国連とILOで仕事をする中で、「グローバルで考え、ローカルに行動しよう」という合言葉があったが、まさに今そういう時代になった。

最近のILOでは、「今のグローバル化に私たちが何をしなければならないか」ということが深まってきた。グローバル化は冷戦構造が終わってから大変大きな問題で、米ソ対立による冷戦構造時代には国境の壁がこんなに大幅に崩れこんなに早くグローバル化が進むとは考えられなかった。90年代に入り、グローバル化が加速する中で、グローバル化に対する負の評価が大きく出てきた。企業が果たしている極めて大きな役

割が認識されると同時に、一方で企業が余りに大きな存在になったために、責任ある行動を求めるということになってきた。したがって、私は労働者の協同組合は大変重要だと思っているが、それと併せて、企業は大変大きな存在であるので、企業が社会的に責任ある活動をしてもらう、あるいはしなければいけない、という活動にも協同組合という運動を通じて、ぜひ目を配っていただきたい。

今、国連は大きな力を持つ多国籍企業に対して大変注目をしている。多国籍企業のトップは中程度の国家のGDPと等しいか超えている。例えばエプソンなどは2000年の総売上高でタイのGDPより多くなっている。そうした中で、多国籍企業の社会的責任という問題が大きくなって、ILOでは1977年に多国籍企業に向けた三者宣言というものを出しているが、その中ではディーセント・ワークの実施、ILOの仕事と人権の原則などが謳われている。もちろん協同組合は人々が力を結集しその中で仕事をつくり、ディーセント・ワークをつくっていくということであるが、同時にこのグローバル化の中で企業が果たしている正と負の大きな役割を認識し、負の役割を直していくところにも視点を置いていただきたい。

グローバル化の方向を変えることはできる

やはり、グローバル化の中では競争が激しくなり、木下さんや吉宮さんのお話のような様々な問題が起こっている。去年12月に東大と共催で、ILOが40年前に受賞したノーベル平和賞を記念しての社会政策シンポジウムを開催した。そこでロナルド・ドーアさんが、「競争の激化と共に社会的不平等が広がってきているが、人々はその不平等に寛容になっているのではないか」と指摘をされた。私はまさにそれだと思っていて、やはり私たちは不平等の拡大を認識し、その拡大をどうやって止めるか、あるいは縮めるか、という活動をこれからはしなければならないのではないかと。まさに公共政策の中の入札から始まって問題は山積しているが、重要なことは今、それぞれの社会の役割を担っている方たちがその役割を自覚し、その役割を補完し合ってよい形に持っていくことである。ILOはグローバル化に対しては「グローバル化は事実である」、つまりグローバル化を止めることはできないと認識しているが、しかし現在のグローバル化の方向は正しくない。現在の方向を変えなければならないし、変えることはできる。そして、変えるキーワードはガバナンスをどうしていくか、という問題だと思ふ。

協同組合が社会的課題に取り組むこと

そうした中で、協同組合は人びとの力を結集し、そこを基盤に活動ができるし、人々が労働者と経営者の両方の性格を持っているので、そういう意味でも非常に大きな役割を果たすことができる。協同組合も現代社会の中で動いているので様々な制約の中で協同組合だけでは解決できない大きな問題がある。しかし協同組合運動を通じて大きな社会の課題にも取り組んでいかないと、

協同組合自身が本来担えるディーセント・ワークというも担えなくなるので、是非幅広い大きな公共政策にもこれからも取り組んでいただきたい。

今、夏休みでILOの日本のオフィスにも4人の学生がインターンが来ている。昨日、インターンに、この日本労協連の「地域再生・就労創出」政策をどう思うかという宿題を出した。社会問題やジェンダー問題、労働法を勉強している若者たちなので、大変に熱心にレポートを出してくれた。彼らは「この方針はその通りだと思う。自分たち若者は怠けているのではなく、やりたい仕事がない。私たちは社会に出て働き、社会の中で自分たちの想いを実現したいという熱い気持ちを持っているのに、自分を受け止めてくれる企業がない。なぜ、社会問題を念頭に入れた企業がないのだろうか。」という報告を受けた。

「見果てぬ夢」を追いかけて

ILOは1920年から協同組合の問題を扱っているが、今年はILO創設85年でありまた、「労働は商品ではない」という有名なフィラデルフィア宣言から60年、ノーベル平和賞を受賞してから40年という重要な節目の年である。第2次世界大戦中、ILOの積極的なサポーターであったアメリカのルーズベルト大統領が1944年にILOの総会をフィラデルフィアに招集したのだが、その時に大統領から「ILOは、とても到達できそうにない夢を追いかけ続けている機関である。しかし、時間と共に政府も労働者も使用者も夢を実現しようとしているのではないか。だから、見果てぬ夢を長い間実現してきたのだ。」という激励の言葉をいただいた。ILO事務局長のファン・ソマビアはその言葉で今年の総会を

締めくくった。皆さん方に申し上げたいのは、何となく「達成できない夢」のように思われるかもしれないが、やはり追いかけていけばILOのように85年もやっていけば、世の中で浸透していく。私は過去20年、海外に勤務していたのだが、その間に労働者協同組合はこれだけの組織に発展したのであるから、やはり未来に訴えるものがあるのではないかと思っている。

最後に、今年ILOは雇用政策のレビューを総会で行った。そのレビューでも重要なことは雇用創出の問題だった。ILOは完全雇用を目標として掲げるべきと考えているが、ディーセント・ワークを達成する中で、雇用創出は重要な問題である。雇用がなければ働く人たちは権利も主張できない。雇用創出をローカル場で実現する大きな力になっていただきたい。